

## 『蝸牛角上の争い』

むかしの中国でのこと。

梁の国の恵子という王さまが、「戴晋人は賢者である」という、うわさを聞いて、お城によびよせました。

戴晋人は、

「カタツムリという生き物がありますが、王さまはごぞんじですか？」

と言いました。

「もちろんだ」と王さま。

「このカタツムリの左の角には、『触』という国があります。右の角には、『蛮』という国があります。あるとき、この二つの国が、土地をめぐって戦争をおこしました。どちらの国も数万人がたおれて死にました。にげてはおいかげ、おいかけてはにげて、十五日間たつて、ようやくりようほうともあきらめて自分の国にかえりました。」

「なんだ、そんなのは作り話ではないか」と王さま。

「では、私が王さまのために、この作り話を本当の話にして差しあげましょう。王さまは、宇宙にはてがあるとお思いですか？」

「いや、ないだらうな」と王さま。

「では、そのはてしないものを想像できる心を持ちながら、せまい地上の国のことしか思わずにくらすのは、生きているのと、死んでいるのと、どちらに似ているでしょうかな」と。

「なるほど」と王さま。

「地上の国の中に魏があつて、魏の中に梁があつて、その梁の中に王さまはおられる。その王さまと、蛮の国と、どちらがいますかな」と。

王さまは「ちがわないな」と言いました。

『蝸牛角上の争い』

恵子、これを聞きて戴晋人を見えしむ。

戴晋人いわく、「いわゆる蝸なる者あり、

君これを知るか」と。いわく、「しかり」と。

「蝸の左角に国する者あり、触氏という。蝸

の右角に国する者あり、蛮氏という。ときに

あいともに地を争いて戦い、伏尸数万、北

ぐるを逐いて旬有五日にしてのち反る」と。

君いわく、「ああ、それ虚言か」と。

いわく、「臣請う、君のためにこれを実<sup>じつ</sup>にせ

ん。君、四方上下にありて窮<sup>きわ</sup>まりありとおも

うや、と。君いわく、「窮<sup>きわ</sup>まりなし」と。い

わく、「心を無窮<sup>むきゆう</sup>に遊ばしむるを知りて、か

えりて通達の国にあるは、存<sup>ぞん</sup>するがごとく亡

きがごときか」と。君いわく、「しかり」と。

いわく、「通達の中に魏<sup>ぎ</sup>あり、魏<sup>ぎ</sup>中に梁<sup>りよう</sup>あ

り、梁<sup>りよう</sup>中に王<sup>わう</sup>あり。王<sup>わう</sup>と蛮<sup>ばん</sup>氏と弁<sup>べん</sup>ありや」

と。君いわく、「弁<sup>べん</sup>なし」と。